

## 【6】摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承の意味

[0] 【3】 で見たように「半座を分かつ」ことは、半座を共有する2人が、①容姿が等しく、②同等の権限を有し、③なにからなにまで同一であり能力も等しいことを表していると考えられる。この仮定が正しければ、釈尊から半座を分かたれた摩訶迦葉は釈尊と容姿が等しく、同等の権限を有し、同一であって等しい能力を有していたことになる。

[1] 摩訶迦葉が釈尊と容姿が等しかったという情報は、【4】の[1]から[8]に見た釈尊が摩訶迦葉に半座を分かたれたことを伝える記事の中には含まれていない。しかしながら『過去現在因果経』に、摩訶迦葉が釈尊と同じく三十二相を有していたとあるのをはじめ、他にも『根本有部律』には「衆相具足」とあり、『毘尼母経』には「大人之相」を有していたとある<sup>(1)</sup>。このように容姿の点で釈尊と摩訶迦葉が等しかったとする伝承も存在する。

ただし、釈尊の異母弟にあたるナンダや従兄弟のデーヴァダッタも釈尊と容姿が似ていたとされ、「三十相」と相が不足している場合もあるが、ナンダについては「三十二相」とされることもある<sup>(2)</sup>。

(1) 『過去現在因果経』(大正03 p.653上)〈14-11〉;爾時憍羅厥叉國有一婆羅門。名曰迦葉。有三十二相。聰明智慧。……

『根本有部律』「(比丘尼)波羅市迦001」(大正23 p.909上)〈14-5〉;月滿生男。姿容超絶、光相炳耀如瞻部金、頂圓如蓋、臂長過膝、鼻脩且直、眉高而長、額廣平正、衆相具足。

『毘尼母経』(大正24 p.803下)〈14-7〉;此婆羅門家生一子。字畢波羅延。父母種姓清淨。諸婆羅門所有經書無不悉達。乃至大人之相亦能達之。

【論文8】【11】摩訶迦葉③「幼名等」の表の「特性」の欄を参照。

(2) ナンダに三十二相があったとするものには以下のものがある。

『給孤長者女得度因縁経』(大正02 p.851上);是佛弟子名曰難陀。淨飯王之子是佛親弟。比佛身量而短四指。三十二相莊嚴具足。(Sumāgadhāvadāna (岩本裕『『スマーガダー＝アヴァダーナ』研究』 仏教説話研究 第五卷 開明書院 1979年 p.041)

三十相とするものは枚挙にいとまがない。例を挙げるにとどめる。

『過去現在因果経』(大正03 p.628中);爾時太子至年十歳。諸釋種中五百童子。皆亦同年。太子従弟提婆達多。次名難陀。次名孫陀羅難陀等。或有三十相三十一相者。或復雖有三十二相、相不分明。

『僧祇律』「单提048」(大正22 p.369上);爾時尊者孫陀羅難陀佛姨。母子大愛道所生。有三十相。少白毫相耳垂垂相。。

『十誦律』「波夜提090」(大正23 p.130中);爾時長老難陀。是佛弟姨母所生。與佛身相似、有三十相。短佛四指。

『分別功德論』(大正25 p.047上);諸比丘各各有相。身子有七。目連有五。阿難有二十。獨難陀有三十相。難陀金色。阿難銀色。

『大智度論』(大正25 p.092上);難陀提婆達等皆有三十相。

[2] 帝釈天がマーンダートリに半座を提供したことが王国を二分することと同義であるように、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かたれたことも、ここでは決して僧団を二分することではないけれども、釈尊によって摩訶迦葉が釈尊と同等の僧伽のリーダー格の地位に置かれたこ

とを示していると考えられる。

[2-1] 釈尊が摩訶迦葉を自身の地位に置こうとしたことは、かえって釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつ伝承を伝えていないパーリのアッタカターで強調されている。SN. 016-006～008 (vol. II p.203) の註釈である SN.-A. (vol. II p.173) では、釈尊が摩訶迦葉に「私か汝のどちらかが説法しなければならない」と法を説くことを要請したこと〈9-1〉について註釈し、そのように言ったのは摩訶迦葉長老を自身の地位に置くため (theraṃ attano thāne thapanattham) であったとする〈9-1〉。「自身の立場に置く」とは「自身の代理にする」という意であると考えられる。

また SN. 016-011 (vol. II p.217) の註釈である SN.-A. (vol. II p.199) では、釈尊が摩訶迦葉にはじめて会った日に釈尊が摩訶迦葉と衣を交換したこと〈14-1〉について註釈し、釈尊が摩訶迦葉の衣をほめたのは、衣を交換したいと考えたからであり、そのように考えたのは摩訶迦葉長老を自身の地位に置こうとしたから (theraṃ attano thāne thapetukāmatāya) であったとする〈14-2〉。

DN.-A. (vol. I p.003)、Khuddakapātha-A. (p.090)、Samantapāsādikā (vol. I p.005) では摩訶迦葉が、釈尊から「九次第定と六神通からなる上人法において〔私を〕ご自身とまったく等しい地位におくことで愛護された (navānupubbavīhārachaḷabhiññāppabhede uttarimanussadhamme attanā samasamaṭṭhapanena ca anuggahito)」ことを思い出しながら結集を決心する場面が語られている<sup>(1)</sup>。

SN. 016-006～008 の対応経『雑阿含』1138～1140 (大正 02 p.300 中) においても、釈尊が摩訶迦葉に「汝が諸比丘を教化せよ。なぜなら、私がいつも諸比丘を教化しているように、汝もそのようにすべきであるから (汝當爲諸比丘説法教誡教授。所以者何。我常爲諸比丘説法教誡教授。汝亦應爾)」と要請している。SN. 016-011 の対応経である『雑阿含経』1144 (大正 02 p.302 下) には衣の交換のことが語られている。アッタカターの解釈が妥当であるならば、これらは釈尊が摩訶迦葉を自身の地位に置こうとされたことを示すことになる。

[2-2] なお「自身と等しい地位に置く」ことが半座とかかわることを示す資料として、MN. 026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.165) と MN. 085 ‘Bodhirājakumāra-s.’ (vol. II p.093)、Milindapañho (p.235) に「アーラーラ・カーラーマ師は私と等しく、自身と等しい弟子である私を同等に位置づけた (āḷāro kālāmo ācariyo me samāno antevāsiṃ maṃ samānaṃ attano samasamaṃ thapesi)」とあるが、【2】-【2】で紹介した『仏本行集経』では同じ文脈においてアーラーラ・カーラーマが菩薩に半座を分かっている。

ウッタカ・ラーマプッタは「同梵行者であり、私と等しく私を師の地位に置いた (udako rāmaputto sabrahmacārī me samāno ācariyaṭṭhāne ca maṃ thapesi)」として、菩薩を同等の地位ではなくて師の地位に置いたためか、『仏本行集経』はここでは半座に言及しない<sup>(2)</sup>。

(1) Udāna-A. (p.195) にも引用されている。

(2) 『仏本行集経』「答羅摩子品」(大正 03 p.757 中)

なお摩訶迦葉が釈尊と同列に扱われる資料については、【論文 8】【8】参照。

[3] 釈尊と摩訶迦葉がなにからなまでに同一であることを示している資料を挙げるのは困難であるが、【4】- [1] に紹介した SN. 016-009 (vol. II p.210)、『雜阿含經』1142、『別訳雜阿含經』117、『中本起經』の「大迦葉始來品」と【4】- [2] に紹介した SN. 016-010 (vol. II p.214)、『雜阿含經』1143において、釈尊と摩訶迦葉の能力は等しい(同等の禪定・神通を有する)とされている。

[4] 釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつたという伝承は、摩訶迦葉が釈尊と容姿が等しく、同等の地位と等しい能力を有していることを示している。しかしながら「半座を分かつ」という行為に、より多くのことがらを読み込むこともできよう。

帝釈天がアルジュナに半座を提供する(【1】- [3])のは、父が息子に半座を提供していることになる。帝釈天とマーンダートリの関係も、マーンダートリの誕生の際に指をしゃぶらせて養ったのが帝釈天であるので、あるいは父子の間柄であると考えられる。そして摩訶迦葉は釈尊の嗣子、法の相続者《14》とされる。

以上見てきたように「半座を分かつ」という行為には「客に席のもう一方の半分を提供して大きな敬意を示す」というだけではすまされないもっと重要な意味が含まれていることが分かる。

なお釈尊が摩訶迦葉に「半座」を分かたれたという伝承は「北伝」にしかないことを指摘した。しかし南伝でも後世には摩訶迦葉は「ブツダのような者」「ブツダに似た者」「*buddhapatiḥhāga*」とされて、これはまさに「半座」が含意するものを一語で端的に表現したものと解される。「半座」はそれを説話的脚色をもって、具象的、視覚的に示そうとしたものと言えるであろう。摩訶迦葉の位置づけについて「半座」への言及のあるなしによって北伝と南伝との間に差を設けるのは、適当ではないと考えられる。

## 【付録】中国撰述文献に見られる釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承

- (1) 『妙法蓮華經文句』(大正 34 p.010 中) ; 頭陀既久鬚髮長衣服弊、來詣佛所諸比丘起慢。佛命令就佛半座共坐。迦葉不肯。佛言吾有四禪。禪定息心從始至終無有耗損。迦葉亦然。吾有大慈仁覆一切。汝亦如此體性亦慈。吾有大悲濟度衆生。汝亦如是。吾有四神三昧。一無形二無量意三清淨積四不退轉。汝亦如是。吾有六通汝亦如是。吾有四定。一禪定二智定三慧定四戒定。汝亦如是。……増一阿含云。一婆羅門白佛。昨有婆羅門至我家。何者是。佛指迦葉。又問。此沙門非婆羅門。佛言沙門法律、婆羅門法律、我皆知。迦葉亦爾。迦葉功德與我不異。何故不坐。諸比丘聞佛所讚。心驚毛豎佛引本因緣。昔有聖王號文陀竭。高才絕倫。天帝欽德遣千馬車造闕迎王。天帝出候與王同坐。相娛樂已送王還宮。昔迦葉以生死座命吾同坐。吾今成佛以正法座報其往勳。對佛坐時天人咸謂佛師。又迦葉共阿難。爲比丘尼說法。有一比丘尼不喜云。販針兒在針師前賣針。迦葉語阿難言。此比丘尼以汝爲針師。我爲販針兒。迦葉語尼言。佛說月喻經。日日增長常如新學者唯大迦葉。汝聞不。於大衆中分半座。汝聞不。……

- (2) 『阿弥陀経疏』(大正 37 p.315 下) ; 又迦葉本起經云。王舍城內有大富梵志名尼拘律。此云無恙。有子名畢撥羅。即大迦葉也。迦葉是姓。畢撥羅是字。佛弟子中頭陀第一。佛當見來分座令坐。
- (3) 『注維摩詰經』(大正 38 p.347 下) ; 什曰。先佛出家。第一頭陀者也。昔一時從山中出、形體垢膩著麤弊衣、來詣佛所。諸比丘見之起輕賤意。佛欲除諸比丘輕慢心故讚言。善來、迦葉。即分床坐。迦葉辭曰。佛為大師。我為弟子。云何共坐。佛言。我禪定解脫智慧三昧大慈大悲教化衆生。汝亦如是。有何差別。諸比丘聞已發希有心咸興恭敬。迦葉聞是已常學佛行。……
- (4) 『維摩經略疏』(大正 38 p.616 中) ; 初總呵云。有慈悲心而不能普者。聲聞之中最有慈悲。如來所歎命共同坐。但小乘慈悲而不圓普。利他不等捨富從貧。
- (5) 『維摩經略疏垂裕記』(大正 38 p.779 下) ; 初總詞。有慈悲心等者荊溪云。抑揚之妙事在於斯。以歎有悲抑之令普故也。如來所歎。命共同坐者。迦葉一時從山中出、形體垢膩著麤弊衣來詣佛所。諸比丘見之起輕賤意。佛欲除諸比丘輕慢心。故讚言。善來。即分床命坐。迦葉辭曰。佛為大師我為弟子。云何共坐。佛言。我禪定解脫智慧三昧大悲教化衆生。汝亦如是。有何差別。諸比丘聞已起慕敬心。
- (6) 『四分律刪繁補欠行事鈔』(大正 40 p.129 中) ; 華手經云。以迦葉行頭陀苦行故來至佛所。如來移身分座與迦葉。辭讓不受。雜含中。佛親命以半座。手授僧伽梨易迦葉所著大衣。於大眾中稱讚頭陀大行。
- (7) 『四分律行事鈔資持記』(大正 40 p.390 下) ; 華手經中言。辭讓者、彼云、我見聖王尚以為難。況復得與分床共坐。我今得見親近咨請已為大利。況乃見命分床共坐甚為希有。如來深具慈悲喜捨等雜含緣同。但加易衣稱讚為異。彼明佛在祇桓諸比丘見迦葉著麤衣來起於慢心。佛即易衣以息彼慢。由行苦行佛尚尊敬則知功勝矣。……  
(p.411 中) 練若中汎話。謂問疾安慰。以為勸誘之端。捨座即分半座與迦葉坐。捨衣謂脫所著衣。易彼糞掃衣披之。
- (8) 『大乘起信論裂網疏』(大正 44 p.458 上) ; 西土初祖摩訶迦葉。終身行此勝行。佛於天人大眾之中讚云。正法久住。全賴此人。所以分半座而令坐。付法眼以傳心也。
- (9) 『汾陽無德禪師語錄』(大正 47 p.606 下) ; 良久復云。祖意難窮。得之者可越階梯。教乘易曉。失之者永隔毫釐。是以禪律同途聖凡不異。迷情不了。背覺合塵。如識衣珠。不從別得。故我大覺世尊。於多子塔前分半座。告摩訶迦葉云。吾有清淨法眼。涅槃妙心。實相無相。微妙正法。將付囑汝。汝當流布。勿令斷絕。如是展轉。西天二十八祖。唐來六祖。……
- (10) 『円悟禪師語錄』(大正 47 p.786 下) ; 釋迦老多子塔前分半座。已密授此印。爾後拈華是第二重公案。……
- (11) 『六祖大師法寶檀經』(大正 48 p.345 下) ; 妙道虛玄不可思議。忘言得旨端可悟明。故世尊分座於多子塔前。拈華於靈山會上。似火與火以心印心。西傳四七至菩提達磨。……
- (12) 『仏祖統紀』(大正 49 p.169 下) ; 迦葉頭陀既久、髮長衣弊、來詣佛所。諸比丘皆起慢心。佛分半座令坐。迦葉不肯。佛即廣讚迦葉功德。與我不異。何故不坐。諸比丘聞為之心驚。佛復為說本因。昔有文竭陀(輔行云即頂生王也)高才絕倫。天帝欽其

徳。遣千馬車造闕迎之。天帝出候命王同坐。共相娛樂送王還宮。昔迦葉以生死座命吾同坐。吾今成佛以正法座報其往勳。迦葉共佛坐。時天人咸謂佛師。即起鳴佛足云。佛是我師。我是弟子(云云)

(13) 『釈氏稽古略』(大正 49 p.754 上) ; 西天一祖摩訶迦葉尊者摩竭陀國人也。…尊者趨於竹林精舍。特申恭敬。如來乃分座命之坐。時大眾皆驚。謂其何以與此。如來為衆廣說其夙縁。以斷群疑。尋為之說法。而尊者即座成道。然其積修勝徳。而智慧高遠故。如來嘗曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。而迦葉比丘亦復如是。……

(14) 『付法藏因縁伝』(大正 50 p.298 中) ; 爾時迦葉披糞掃衣、來詣佛所稽首禮敬合掌而立白佛言。世尊、我今歸依無上清涼。願哀納受聽在末次。世尊歎曰。善來、迦葉。即分半座命令就坐。迦葉白佛。我是如來末行弟子。顧命分座不敢順旨。是時衆會咸生疑曰。此老沙門有何異徳。乃令天尊分座命之。此人殊勝唯佛知耳。於是如來知衆心念欲決所疑。即宣迦葉大行淵廣。世尊又曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。迦葉比丘亦復如是。又於往昔過去久遠。時有聖王號文陀竭。高才超世智慧無倫。時天帝釋欽敬其徳。遣七寶車造闕迎王。時乘天車飛空而往。天帝出迎與共同坐。相娛樂已送王還宮。佛告比丘。爾時天帝今迦葉是。文陀竭王則吾身是。迦葉往昔以生死座命吾同坐。故吾今日成無上道。以正法座報其本勳。爾時世尊即為迦葉。如應說法示教利喜。譬如鮮淨白氈易受染色。即於座上得阿羅漢。三明六通具八解脫。高才勇猛儀相安詳。常與如來對坐說法。……

(15) 『続伝燈録』(大正 51 p.478 下) ; 師曰。兩重公案。問昔日靈山分半座。飲光對面被搽糊。今朝此席又如是。還有完全句也無。……

(p.485 中) 師曰。切忌地盈虛。問昔日靈山分半座。二師相見事如何。

(16) 『伝法正宗記』(大正 51 p.719 上) ; 入山以杜多行自修。會空中有告者曰。佛已出世。請往師。之尊者即趨於竹林精舍。致禮勤敬。如來乃分座命之坐。而大眾皆驚。謂其何以與此。如來知之。乃說其夙縁以斷群疑。尋為之說法。而尊者即座成道。然其積修勝徳。而智慧高遠。故如來嘗曰。我今所有大慈大悲四禪三昧無量功德以自莊嚴。而迦葉比丘亦復如是。……

(17) 『法苑珠林』(大正 53 p.541 下) ; 夫婦節操深厭世間。啓辭父母求欲出家。父母見已遂便聽許。於是夫婦俱共出家來至佛所。佛與分座。佛為說法。即於座上得阿羅漢。婦於後時亦得羅漢。迦葉在世常與如來對坐說法。……

(18) 『一切經音義』(大正 54 p.372 上) ; 糞掃衣(上分問反下柔到反。糞掃衣者、多聞知足上行比丘常服衣也。此比丘高行制貪不受施利、捨棄輕妙上好衣服、常拾取人間所棄糞掃中破帛、於河澗中浣濯令淨補納成衣、名糞掃衣。今亦通名納衣。律文名無畏衣。惡人劫賊之所不奪。經中亦名功德衣。一切如來之所讚嘆服。此衣者諸天常來禮敬供養。是故如來讚大迦葉命令同坐易衣而披之、故名功德衣也)